

# 三焦の再検討とインド・ギリシャ医学に みられる類似の生理観について（上）

東京理科大学薬学部

遠藤次郎

私どもの研究室では漢方医学だけではなく、他の主要な伝統医学、たとえばアユルヴェーダ、仏教医学、アラビア医学、ヒポクラテス医学、ヨーロッパの植物療法、江戸時代に日本に紹介された蘭方医学（オランダ医学）についても研究をしています。漢方医学を世界の伝統医学という広い視野でもう一度捉えなおして、これを現代に活かす方向性で研究しています。

今回取りあげた三焦については、中国の古典では様々な捉え方がされており、私自身もこれをどのように認識するか、長い間問題として残してまいりました。ところが、別な件でインドやギリシャの身体観を調べておりましたおり、そこに三焦とよく似た概念を見いだしました。これをきっかけとしてもう一度三焦をテーマにして、これを整理してみることにしたのであります。まだまだ不十分な点もありますが、現段階での私の見解を話したいと思います。

三焦は漢方医学における解剖や生理の研究の中で最も多くの論争が為されてきたものの一つであります。それにも関わらず未だに明瞭な解答が得られないように思われるのであります。三焦の理解を困難にさせている最大の原因は、その把握のされかたが古典の種類によって大きく異なっていて、三焦の原義をどのように定めてよいか判らない点にあります。一つの説にのっとると他方の三焦の意義を説明しきれなくなります。そこで三焦の起源はひとつではなくて、2つも、3つもあるという見解もあります。

私が今回主張するところの三焦は、一元論または一元論に近いものであります。三部九候診、六府（といっても普通の六府ではない）、寸関尺診、奇経八脉といっ

た概念と三焦は深く関わっています。が、ことに今回は三焦を「焦理」と「膏肓」という立場から話しをすすめてゆきたいと思います。またギリシャやインドの伝統医学の類似した概念をこれと絡ませながら考察を進めたいと思います。

### 1、『金匱要略』にみられる三焦

まず始めに(1)をみて下さい。『金匱要略』臓腑経絡先後病の文章を取りあげました。この文章を取りあげた理由は、これが『素問』『靈樞』『難経』に比べて後の時代の文献であります。いろいろな文献の中で、三焦の原義に近い内容を持っていて、三焦全体を把握するのに役に立つからであります。

最後の二、三行目にみられる「腠理」は一般にいわれているような皮膚のすじ目の意味ではなく、臓腑のすじ目まで含めた広い意味で使われています。後に述べますが、「焦理」或いは「三焦理」という概念があり、皮膚のきめばかりではなく体内のきめまでも含めています。この「焦理」

(1)

・「三焦理」を「腠理」と表現している例もあります。ですからここでいっている腠理および三焦は皮膚と五臓、或いは皮膚と臍下の丹田(=元真)を連繫する網目状の通路と解することができます。ここにおける三焦の三は前に書いてある文章の内容をうけています。その内容をみますと、人体に対して外界から作用するものとして、まず正常な例として一

「金匱要略」 「臓腑経絡先後病」

夫人稟五常因風氣而生長風氣雖能生萬物亦能害萬物如水能浮舟亦能覆舟若五臟元真通暢入即安和客氣邪風中人多死千般災難不越三條一者經絡受邪入臟腑為內所因也二者四肢九竅血脉相傳壅塞不通為外皮膚所中也三者房室金刃蟲獸所傷以凡詳之病由都盡若人能養慎不令邪風干忤經絡適中經絡未流傳腑臟即醫治之四肢才覺重滯即導引吐納鍼灸膏摩勿令九竅閉塞更能無犯王法禽獸災傷房室勿令竭之服食節其冷熱苦酸辛甘不遺形體有衰病則無由入其腠理候者是三焦通會元真之處為血氣所注理者是皮膚臟腑之文理也

行目の「五常の風気」をあげています。次いで異常な例として外から侵入する3つの原因をあげ（一、二、三）、それに対する予防方法・治療方法（①、②、③）をあげています。一、二、三、と①、②、③は互文の関係にあります。このようにみえますと、三焦の三は外界と交通する3つの通路と解することができます。3つの通路とは、具体的には、一番目にあげたものとして皮膚から経絡を通して臓腑に至る道です。二番目は腠理皮膚のすじ目、汗腺、九竅などから分肉の間を通過して、筋肉筋骨あるいは最後には骨髓液に滲入する道であります。三番目には「元真」すなわち臍下の丹田を中心に丹田から人間の意志で外界にむけて作られる通路であります。この3つの通路は他の古典を参考にしますと、はじめのものは「地の気」の通路、2番目は「天の気」、3番目は「人の気」の通路です。すなわち三焦の三は天地人の三才のいみであります。天の気と地の気は解りやすいのですが、人の気がちょっとわかりにくいので補足します。人の気の通路というのは人は天地の気にしたがっていけば取り立てて必要ないのですが、しかしここに書いてあるように房事過多とか王法によらない自分勝手な通路を作ることがあります。そうすれば災害や刀にでくわしてしまう。これが人の気の通路であります。以上のことを考慮すると三焦は外界の天地の気と丹田の人氣を連繫する通路であることがわかります。「人の気」の立場でいいますと、丹田におさめられている個性的な精気をいかに外界の気の規則性に対応させて活動させるかというテーマが養生の大前提として存在するわけであります。さらに付け加えるならば三焦の通路を運搬するエネルギー源として、後ろから四行目にあるように食物の消化に頼っている点も注意すべきであります。これについては後で考察します。

以上『金匱要略』蔵府経絡先後病にみられる三焦について考察してきました。

次に直接三焦に関係ないのですが今いった生理観と極めて近似した見方が古いところにたくさんあります。いくつか紹介してみたいと思います。

『管子』水地篇の例です。ここでは男女の精気の合体から妊娠して子どもが生まれるまでの経過を述べています。男女の精気の合体から、月を追って述べているわけですが一番始めに五臓ができると書いてある、その次に何ができるかという五肉、あるいは本によっては五内と書いてある。これは今いった筋肉筋骨の意味であります。その次に九竅ができる。その時点で生まれ、呼吸をしたり光を見たりして外界の天地の気と交流する。その結果、目が見えたり耳が聞こえたり、心で思うこ

人水也男女精氣合而水流形三月如咀

咀者何曰五味五味者何曰五藏

酸主脾鹹主肺辛主腎苦主肝甘主心

五藏已具而後生肉或因生肉之文疑也字為生字之誤粗矣

脾生隔肺生骨腎生腦肝生革心生肉

五肉已具而後發為九竅

脾發為鼻肝發為目腎發為耳肺發為竅

五月而成具形十月而生生而目視耳聽心慮

とができるようになるといったことが書いてある。この内容は非常に重要なことでありまして始めの精気が合体したもの、これ自身がアクションを起こすかというとして決してそうでないのです。外界の気と交流することによって人間は初めてアクションをおこすことができるのだということです。この説は五蔵の精気は五肉を経て腠理九竅に通じて外界の気と交流しようという点で、『金匱要略』の三焦の通路の説と非常に似ています。

もうひとつ具体的な例をあげます。(30)に示しました。三部九候診の見方でありませす。ご存知のように三部九候診は天地人の

三才で組み立てられています。ただし今日の三部九候診はかなり乱れておりまして見直しが必要です。これを整理すると、三部九候診は「五蔵と形体と胃気」の3つを見るように組み立てられています。五蔵は外から見れないものなので、「原穴」でみる。形体（筋肉筋骨）は直接外から望診することができます。形体は陽の気すなわち天の気に相当します。五蔵は陰の気、すなわち地の気に相当します。天の気と地の気を交流させる人の気としてここでは胃をあげています。一方、三部九候診に関連させて更に古い『靈樞』九針十二原篇（これは『靈樞』の中でも、丸山昌朗先生がいつてました「古針経」、『靈樞』よりもうひとつ前の「針経」の逸文）の診察法をここにのせて、九針十二原篇の見方と比較しました(30の右図)。天の気と地の気は同じ見方をしています。人氣として膏・肓のふたつの原穴（X，Y）をあげております。さきの『金匱要略』臟腑経絡先後病の人氣である「元真」はここでは「肓の原」に対応するわけです。三部九候診も『素問』の中では一番古い脈診法だといわれています。今いったように九針十二原篇も非常に古い物でありますので、この『金匱要略』の見方というのは非常に古い伝統的な見方を受け継いでいるという事ができます。ただ九針十二原篇の中には三焦という言葉は出てきません。

# (30) 三部九候診

五臟 (5) と形体 (3) と胃氣

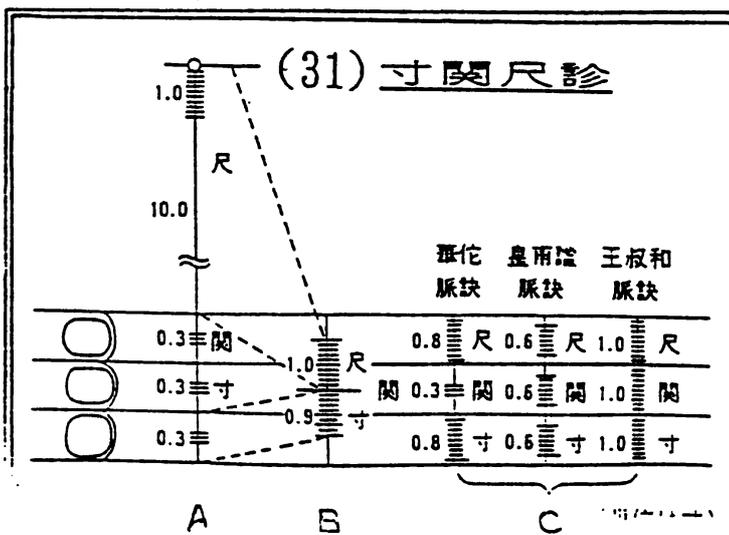
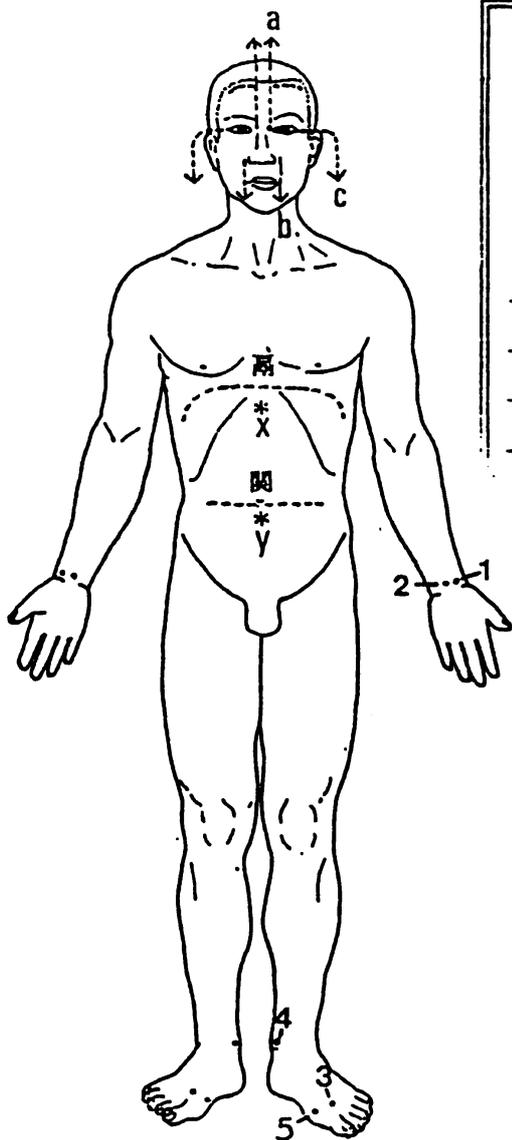
五臟 (地) と形体 (天) と膏肓 (人)

三部九候診

三才	脈診部位	診察目標
上部 (天)	天地人 兩頤の動脈 兩頬の動脈 耳前の動脈	頭角の氣 口齒の氣 耳目の氣
中部 (人)	地天人 手陽明 手太陽 手少陰	胸中の氣 肺 心
下部 (地)	天地人 足厥陰 足少陰 足太陽	肝 腎 脾 胃の氣

「九針十二原」中の診察法

形蔵	其氣	診察法	部位
形蔵四	其氣三	} (視其色) (察其目)	天 (頭部)
	胸中・胃氣		膏の原, 鳩尾 X 肓の原, 臍臑 Y 人體幹
神蔵五	其生五	肺の原, 大淵 1	地 (四肢末端)
		心の原, 大陵 2	
		肝の原, 太衝 3	
		腎の原, 太谿 4	
		脾の原, 太白 5	



## 五陰経と六陽経の経脈説

- 肝
- 心
- 脾
- 肺
- 腎

- 兩頤の動脈——手, 足の太陽経を診る a
- 兩頬の動脈——手, 足の陽明経を診る b
- 耳前の動脈——手, 足の少陽経を診る c

2、「焦理」

(2)

次に『金匱要略』に見られた腠理、すなわち「三焦理」について見てゆきたいと思います。(2)『靈樞』論勇篇に見られる例であります。「三焦理横」「其焦理縦」という記載が見られます。この意味は時間がないので結論だけを述べますが「皮膚之薄厚、肌肉之堅脆緩急之分」に対応しております。したがってここの「三焦理」は皮膚のすじ目と解釈できます。文章の順番を参考にしますと、ここにおける「三焦理」は九竅（この場合は目と鼻です）や腠理が五蔵を連繋する通路であると考えることが可能です。

夫忍痛與不忍痛者皮膚之薄厚肌肉之堅脆緩急之分也非勇怯之謂也黃帝曰願聞勇怯之所由然少俞曰勇士者目深以固長衡直揚三焦理橫其心端直其肝大以堅其膽滿以傍……怯士者目大而減陰陽相失其焦理縱弱筋短而小肝系緩其膽不滿而縱

「靈樞」「論勇」

論勇篇の三焦の意味に近い例が『靈樞』歳露論篇に見いだすことができます(3)。歳露論篇の文章はこれまでに三焦を考察する対象にされなかった文章です。『靈樞』では

「腠理」ですが、『太素』では「焦理」となっています。これによって補正して見直すと、全文が三焦を考

(3)

える上で手がかりを与えてくれる文章であります。「焦理郄」「焦理薄」の例が見られます。また、これらが毛髪とか煙垢とともに論じられておりまして、このことから焦理の意味を窺うことができます。焦理が毛髪や煙垢を生みその厚さと深さによって性状が規定されると理解できます。すなわち、ここにおける「焦理」は論勇篇の「三焦理」と同じく、腠理より五臓あ

得三虚者其死暴疾 得三實者邪不能傷人也  
乘年之衰逢月之空失時之和因爲賊風所傷是謂三虚  
願聞三實……逢年之盛月之滿  
得時之和雖有賊風邪氣不能危之

虚其衛氣去形獨居肌肉減皮膚腠理開毛髮淺  
焦理薄烟垢落當是之時遇賊風則其入也深其病  
人也卒暴……  
手髮堅焦理郄烟垢者當是之時雖遇賊風其入淺  
亦不深人身盛時法月及與西海皆盛實也但賊邪不入凡有六實一  
毛髮堅實不虛五曰血氣精而不濁二曰肌肉充實不減三曰皮膚厚理不閉四曰  
六曰烟塵垢膩解於腠理有此六實故賊風雖入不能深也 干按靈樞甲乙  
人血氣  
人血氣精肌肉充皮膚緩

賊風邪氣之中人也不得以時然必因其開也其入  
也深其內極也疾其病人卒暴……  
人與天地相參也與日月相應也……

「靈樞」「歳露」(『太素』28「三虚三実」により補正)

るいは中極（ここでは「内極」、「極」という字は北極南極の極、極の真ん中、ツボでいえば中極、内極は身体の中心部、臍下丹田）にいたる網目状の通路といえます。「焦理」に対して楊上善が注を加えています。「三焦之氣発於膝理、故曰焦理」。この説はある程度当を得た見解といえます。ここにおける焦理が三焦理と解釈できるもうひとつの理由としては三行目に天地人の三才の見方（「人与天地相参也、与日月相応也」）が存在すること、後ろから四行目に三虚三実（年・月・日の氣）というのが示されていることにあります（三虚三実というのは年月日の氣、年月日というのは直接には天地の氣とはつながりませんが、天の氣が月で、地の氣が年といったような記述もありますので天地人のひとつの変型とみられます）。以上のことから論勇篇、歳露論篇にみられる焦理の概念は『金匱要略』にみられたものとはほぼ同じであり、『靈枢』の時代に『金匱要略』にみられた焦理の概念がすでに存在していたとみられます。

三焦を考える上で焦理という概念はいままであまり注目されなかったようですが、私は非常に重要な概念だと思います。そこでこれをもう少しはっきりさせたいこともありまして、ギリシャ医学の中にこれとよく似た概念が存在することを紹介したいと思います。

### 3、『ティマイオス』(15)～(24)の「編み目細工」

ヒポクラテス全集の内容はインドの伝統医学とはあまり共通していませんが、プラトンの『ティマイオス』はインドの伝統医学や漢方医学と数多くの共通点が見られ、とても魅力的な古典であります。そのなかに焦理と極めて類似した見方があるのを見いだしました。

(15)のところでは神が人間を作るに当たり、内臓その他の主要な部分を作り終えたあと、火と空気とで体全体を保たせるようにしたことを述べています。(17)(18)ではその火と空気による具体的な制御の構造をのべています。その構造は「編み目細工」であります。内部はすべて火で構成し外枠は空気製にしています。(19)(20)(21)では外枠の空気製の通路によって呼吸が行われ、これは肺呼吸も皮膚呼吸も両方関連させていますけれども、その呼吸の空気の入りによって、内部の火の通路も運動することを述べています。火の運動は何をするかといいますと、(22)に示しているように食物の消化もそのひとつであります。後ろから三行目「火はそれらの食

『ティマイオス』 プラトン (紀元前四二九—三四七)

(15)

ところで、死すべき定め<sup>(1)</sup>の生きもの(人間)の部分となり<sup>(2)</sup>肢体となるもの<sup>(3)</sup>のすべてが、結び合<sup>(4)</sup>わさ<sup>(5)</sup>って一体化されてしまうと、その生きもの<sup>(6)</sup>にとっては、生命を、火と空気の中で保<sup>(7)</sup>って行くのが「必然」の結果となったのだが、またそのために、それはこの火や空気によって、溶かされたり、空にされたりして、衰弱して行きましたから、そこで神々は、このもののために、救助の策を講じました。

(1)栽培植物としての生きもの

(16)

さて、神々は力すぐれたものとして、われわれ力弱きもののために、糧として、以上に述べたすべての種族を植えてしまいました。言ってみれば、流れが注いで来て、身体がそこから灌漑されるようにというわけです。そして、まず最初に、皮膚と肉とがくっついて一体をなしているところの下に、暗渠という形で、背中に沿って二本の血管を切り開きました。これは、身体が、たまたま、左右を備えた二重のものであるのに対応させられているのです。そして、これらの血管を、脊椎に沿って、「この脊椎といっしょに」生殖力のある髄をも間に挟むような恰好で、下へ垂らしたのでした。それは、一つには、この髄ができるだけ元氣旺盛であるようにということと、

(食物や飲物を)

(17)

さて、神は、腹腔から血管へと灌漑するのに、これらのもの(火と息)を利用しました。つまり、空気と火を材料にして、これを編み合わせて、ちょうど「釜」のような編細工をこしらえたわけなのです。

さて、この編

(18)

細工の内部はすべて、これを火で構成し、漏斗状の口と、外枠をなす胴体とは、これを空気製のものにしました。

(19) つまり、われわれは、そのものの中心部のところは、端から端まで全部、火で編まれているが、それ以外の外側の部分はすべて、空気で編まれている。さて、熱いものは、その自然の性に従って、

自分自身の場所へと、自分の同族のものを目指して外へ出て行くものだという点に同意しなければなりません。<sup>(1)</sup>  
E ところが、出口は二つあったのです。一つは、身体(全体)を通して外に向うもの。いま一つは、口腔と鼻孔を通るものでした。ですから、熱いもの(内部の火)が、そのうちの一方の出口のところにあるもの(=空気に向かって突進する場合にはいつでも、まわり押しに押しで行って、もう一方の出口のところにある空気を押すこと)になります。

(20) というわけで、胸部も肺も、息を外へ放つその間にも、身体のまわりの空気がぐるぐるまわりに追われて、目の疎い肉の組織を通して、中へと滲透して来るので、それによって再び充たされることとなります。そして、今度はまた、空気が向きを転じて、身体を通して外へ向かう時には、この空気は、口腔と鼻孔の通路に従って、息を、(身体の)中へと、まわり押しに押し込めます。<sup>(2)</sup>

(21) このようにして、それは、(被作用・反作用の)両者によって、あちら向きに動いたり、こちら向きに動いたりして揺れ動く円環運動を作り出して、吸気―呼気を生ぜしめるのです。<sup>(3)</sup>

(22) ところで、われわれの身体が、すべてこうした働きをしたり、またこうした作用を受けたりすると、このことから、身体は、潤されたり冷やされたりして、養われ、生命を維持することができるようになりました。というのは、息が入ったり出たりするにつれて、それと結びついている内部の火がこれに伴って動き、そしてこのようにして、火が絶えず腹腔を通りぬけて行ったり来たりしながら、腹腔へ入って行くさいに、食物や飲物を捉えるような時には、いつでも、火はそれらの食物や飲物を溶かし、そして、これを細分して、出口を通して自分の進む方向へと運んで行って、ちょうど、泉から水路へ掻き出すように、これを血管に向かって掻き出し、こうして、血管の流れが、ちょうど水路を通るように、身体を通して流れるようにするからです。

(23)

ところで、このようなことの起こる、そもその出発点が何に由来するのとかという、その原因は、次のようなものだとしなければなりません。すなわち、生きものというものは、どれも、その内部の、血液や血管の周辺のところが一番熱いものなのでして、この熱は、いわば、生きもの自身のうちに内在している、火の泉とでも言うようなものなのです。

(24)

この若い組織の  
中に、何か食物や飲物を構成している三角形が外部から入り込んで来て、そこに取り込まれると、後者の、外部から入り込んで来た三角形は、若い組織自身の三角形よりも古びていて弱いわけですから、この組織は、新しい三角形でもって侵入者の三角形を切って征服し、そして、(当の生きもの)の三角形と同種の三角形多数で、この生きものを大きくするのです。……  
髓のところの三角形の絆が、労苦のために、それまで組み合わさっていたのが、もはや持ちこたえられなくなって切れると、それが今度は、魂の絆を解き、そして、魂は自然に解放されて、快く飛び去ります。

(種山恭子訳『プラトン全集』12、岩波書店、一九七五)

(25)

エンペドクレス (紀元前四八三—四三五)

次のような仕方です。すべてのものは息を吸い、息を吐く。あらゆるものには、血が引いたあとの(血のな)肉の脈管が、身体の表面にまでびていて、

これらの脈管の口のところでは、皮膚のいちばん外側の表面は密集した溝(小孔)が一面に穿たれていて、そのために、血は

5 その内部にとどめられるが、他方、空気にはやすやすと通過できる路が開かれていることになる。かくして、そこ(表面の小孔)からなめらかな血が、はげしく退き去るときには、

泡立つ空気は、狂乱の高波をなしてその中へ突進し、血が駆けもどると、空気は再び吐き出される。

(廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』二六〇頁、

講談社、一九八七)

物や飲物を溶かし…ちようど泉から水路へ掻い出すように、これを血管に向かって掻い出し…身体を通して流れるようにするからです。」とあります。血管中の血液は当然身体全体を保育するわけでありますが、ことに生殖力のある髓に精気を与え、髓ができるだけ元気旺盛であるようにすることを、(16)(24)で述べています。以上が『ティマイオス』に見られる三焦に類似した見方の概略であります。火と空気の網目状の通路はまさしく焦理そのものであります。火が飲食物の消化や生殖力のある髓を養う点も『金匱要略』の内容と共通しています。

後漢の初期に書かれた『白虎通』という書物の中で、三焦を次のように規定しています。「上焦如竅、中焦如編、」上焦が腠理や九竅に通じて、中焦が網目状だというわけです。この規定が網目細工のイメージとぴったりあって、これを見つけたときちょっと嬉しかったのを覚えています。なお火と風による呼吸論は『ティマイオス』よりもっと古いエンペドクレス(25)に見いだすことができますのでかなり古い見方だったようであります。

話しをまた漢方の古典にもどします。

以上腠理について検討してきましたが、『金匱要略』にみられる三焦と元真の関係について他の文献に当たってみたいと思います。

#### 4、『難経』の三焦

(4)に示しました『難経』六六難の例がほぼ同じ内容をもっています。この六六難に規定されている三焦は「原気の別使」としての役割を与えておりまして、皆さまがよくご存知のものであります。これは『難経』の代表的な三焦論です。ここにおける内容を整理しますと、次のようであります。臍下腎間の動気が生命の根源(人氣)であり、十二経脈の根源であるところから「原」といわれる。原の精気は五蔵六府を経歴してさらには手足の原穴に至ります。原穴を介して外界の天地の気と交流しあいます。すなわち三焦というのは原の気と天地の気の交流する通路であることになりま

(4)

「難経」六十六難

六十六難曰經言肺之原出于太淵……  
 十二經皆以俞爲原者何也然五藏俞者三焦之所  
 行氣之所留止也三焦所行之俞爲原者何也然臍  
 下腎間動氣者人之生命也十二經之根本也故名  
 曰原三焦者原氣之別使也主通行三氣經歴於五  
 蔵六府原者三焦之尊號也故所止輒爲原五蔵六  
 府之有病者取其原也

す。以上の内容を先に述べた『金匱要略』や『靈樞』の記述と比較してみます。人氣の源泉部位であるところの臍下の腎間の動気はすでに明らかにした『金匱要略』の「元真」とか『靈樞』歳露論篇の「内極」に相当します。また三焦の外界との接点を手足の原穴とする見方はすでに三部九候診の中でみてきました。ここでは三焦の三は「三氣」と表現してその内容についてはふれていませんが、『金匱要略』や歳露論篇にみられた天地人の三つの気と同じと見てまちがいありません。以上、ここにおける三焦は既に述べてきた『金匱要略』の三焦と同類であることがわかります。

### 5、『靈樞』の三焦

次に『難経』六六難と真つ向から対立する見方、(5)の『靈樞』營衛生会篇の内容を検討してみたいと思います。六六難と營衛生会篇の説は三焦の説の両横綱みたいなものであります。ここでは三焦を胃の消化作用と関連させて論じています。まず

#### (5) 「靈樞」 「營衛生会」

黄帝曰願聞營衛之所行皆何道從行  
岐伯答曰營出於中焦衛出於上焦  
黄帝曰願聞三焦之所出  
岐伯曰上焦出於胃上口並咽以上貫膈布胸中走掖  
循太陰之分而行還注陽明上至舌下足陽明  
常與營俱行於陽二十五度行於陰亦二十五度一周也  
故五十周而復大會於手太陰  
黄帝曰人有熱飲食下胃其氣未定汗則出或出於面  
或出於背或出於身半其不循營衛氣之道而出何也  
岐伯曰此外傷於風內開腠理毛蒸理洩衛氣走之  
固不得循其道此氣慄慄滑疾見開而出故不得從其道故命曰漏洩  
黄帝曰願聞其中焦之所出  
岐伯曰中焦亦並胃口出上焦之後此所謂受氣者必糟粕承津液  
化其精微上注於肺脈乃化而為血以奉生身莫貴於此  
故獨得行於經隧命曰營氣  
黄帝曰夫血之與氣異名同類何也  
岐伯曰營衛者精氣也血者神氣也故血之與氣異名同類焉  
故奪血者毋汗奪氣者毋血故人生有兩死而毋兩生  
黄帝曰願聞下焦之所出  
岐伯答曰下焦者別迴腸注於膀胱而滲入焉故水穀者常并居於胃中  
成糟粕而俱下於大腸而成下焦溲而俱下濟必別汁循下焦而滲入膀胱焉  
黄帝曰人飲酒亦入胃穀未熟而小便獨先下何也  
岐伯答曰酒者熟穀之液也其氣悍以滑故後穀入而先穀出焉  
黄帝曰善余聞上焦如霧中焦如飴下焦如瀼此之謂也

(「太素」12「營氣」により補正)

一行目で営気と衛気はどの道を通っていくかを質問しています。これに対して営気は中焦から出て、衛気は上焦から出ると答えています。質問に対する答えとしては営気は中焦の道に従っていき、衛気は上焦の道に従っていくという答えでなければならないのです。このややずれた答えをした理由は、この篇の名前「営衛生会」からもわかるように、この篇のテーマが営衛の生まれる場所と会合する場所を問題にしていることと関連しています。その証拠に四行目に、始めに上焦の出発点を述べ（「胃の上口より出る」）最後に会合点をのべています（「手の太陰に大会する」）。以上のことから上焦ならびに中焦とは出発点から終点までを意識した衛気ならびに営気の通路という事ができます。上焦・中焦の通路に関してもうひとつ注目されることは、上焦・中焦が胃の上口からいったん肺に至って、つぎに手の太陰（気口）に行くという点であります。この経路の意味は文の内容から次のように推定されます。すなわち外界の気の規則性を獲得するために肺や気口部に行く、獲得された規則性に従って経脈を規則的に循行させる、

という意味であります。このような見方を総合すると上焦及び中焦という概念は水穀のエネルギーを天地の気の規則性に合わせて起点から終点まで巡行させる衛気と営気の通路を意味するという事ができます。起点から終点まで意識した三焦の通路は『難経』にも明確に打ち出されています。たとえば(6)『難経』三一難の「三焦は水穀之道路、気の終始するところなり」と明確に規定しています。このほか既に引用した(4)の六六難においても後ろから二行目の「原は三焦の尊号なり、故に止まる所輒ち原と為す」、すなわち起点が臍下の丹田の原でありまして、終点が手足の原穴である、だから原というのが三焦の尊号なのだというわけです。六六難に見られる三焦と営衛生会篇に見

(6)

「難経」三十一難

三十一難曰三焦者何稟何生何始何終其治常在何許可曉以不然三焦者水穀之道路氣之所終始也

上焦者在心下下膈在胃上口主內而不出其治在臍中玉堂下一寸六分直兩乳間陷者是

中焦者在胃中脘不上不下主腐熟水穀其治在臍

下焦者下在臍下三寸主分別清濁主出而不內以傳導也其治在臍下一寸

故名曰三焦其府在氣街一本曰衝

られる三焦とは大きな隔たりがあるように見られますが、規則性をもった循行経路という点では共通しています。これをいいなおすと、外界の天地の規則性を受た通路であるという点で共通しています。

つぎに営衛生会篇と『金匱要略』の三焦を比較してみたいと思います。(5)に示された衛気の通路である上焦は経脈の外の分肉の間を通る通路であるといわれています。他方、営気の通路である中焦は経脈の中を流れるといわれています。(5)ではそれほど明確に書かれてはいないのですけれど、その次の(7)の『靈枢』癰疽篇の例文はそれを明確に示しています。上焦の通路は分肉の間を流れ、決まった通路はないですね。肉の割れ目と割れ目の間をちよろちよろと流れます。中焦の通路というのはトンネルであり、レールが敷かれているので極めて精確に一日に何回まわるというのをやってのける。上焦は分肉の間を流れ、一応経脈に準ずる形で回るのですけれど、時に応じて外邪が来るとよそに行ったりする役目を持っているので中焦よりは一定していない。(5)および(7)の『靈枢』に示された上

焦と中焦の通路は『金匱要略』にみられる三つの通路にそれぞれ一致しています。すなわち中焦の通路は経絡を  
通って臓腑に入る地の気の通路であります。上焦の通路  
は天の気のもので分肉の間を通る通路であります。『靈  
枢』営衛生会篇では議論が高度になっておりまして、す  
でに天地人の三才の見方はみられないのでありますが、  
(7)の後のほうに「天と合同して休止することを得ず」、  
営衛は外界の天の軌道と一緒にあってめぐっているのだ  
とあることから、本来は天地人三才にのっとたものであ  
ることが理解されます。営衛生会篇で残された最大の問  
題、すなわち『難経』六六難では臍下丹田が三焦の源泉  
部であるのに対し、ここでは胃が三焦の中心であります。  
これをどのように解釈するかについてであります。これ

についての最終的な結論はあとで膏肓との関連で明らかにしますが、当面ここでは臍下丹田の精気と胃の気は、後世、先天の気と後天の気といわれるものでありまして、両者とも「人氣」に属するものであることを述べておきたいと思ひます。なお営衛生会篇の後半の下焦に関しては別な角度からの検討が必要でありますから後で

(7) 「靈枢」 「癰疽」 (「太素」 26 「癰疽」 により補正)

腸胃受穀上焦出氣以溫分肉而養骨節通腠理  
中焦出氣如露上注於谷而滲於脈孫絡津液  
和調變化而赤為血和則孫脈先滿滿乃注於絡  
脈皆盈乃注於經脈  
陰陽已張因息乃行有經紀周有道理  
與天合同不得休止

まとめて考察したいと思います。

## 6、経絡、六腑に関連した三焦

次にここでまた視点をかえまして、今度は経絡に配当される三焦と、六腑のひとつである三焦について考察してみたいと思います。ともうしましても、経絡に配当される蔵府はいわゆる六蔵六府でありまして、結局は六府の一つである三焦とは何かという問題に帰結するわけでありまして、六府はご存知の通り大腸・小腸・胃・胆・膀胱・三焦であります。古典の中では多くの場合膀胱とペアにして論じられています。まずこの辺の問題から取り組んでみたいと思います。これを解決する前段階として、(8)(9)の三八難・三九難に述べられている三焦と命門の関係について触れておきたいと思ひます。三八難では五蔵六府の立場に立って五蔵と対

を為さない残りの府は三焦であることを述べています。三九難では六蔵五府の立場に立って府と対を為さない残りの蔵を命門としています。大抵の所では三焦と心包が表裏の関係にあることを述べていますが、ここでは明らかに三焦と命門が表裏の関係にあることを述べています。一方、三八難では三焦を手の少陽経に属させています。手の陽明大腸経、手の少陽三焦経、手の太陽小腸経と陽経が3つ並ぶうち、大腸経と小腸経にはさまれる形で三焦経がある。大腸、小腸が何を指すかという、普通小腸から大腸に伝わって食物が排泄されるという見方をしますけど、注意深く検討してみると、ふたつの見方が古典の中に見られます。解剖学的にはいまいったように小腸の次に大腸があるのですけれども、「内景図」五蔵六府が書いてある解剖図ですが、ここでは大腸は大腹部にある腸、小腸は少腹部にある腸を指していま

(9)

「難経」三十九難

三十九難曰經言府有五藏有六者何也然六府者正有五府也然五藏亦有六藏者謂腎有兩藏也其左爲腎右爲命門命門者謂精神之所舍也男子以藏精女子以繫胞其氣與腎通故言藏有六也府有五者何也然五藏各一府三焦亦是一府然不屬於五藏故言府有五焉

(8)

「難経」三十八難

三十八難曰藏唯有五府獨有六者何也然所以府有六者謂三焦也有原氣之別焉主持諸氣有名而無形其經屬手少陽此外府也故言府有六焉

す。そうしますと、大腹部と少腹部に挟まれた三焦というものは、結局は上の大腸と下の小腸の境の所、境はどこかといいますと臍であります。臍を境として少腹と大腹に分かれます。解剖図でいいますと闌門というのが三焦ということになるわけです。足の経絡でいえば太陽経は背中、陽明経は腹、少陽経は横ですね。少陽は半表半裏で表と裏の境に当たる。腹でも結局同じで大腹と少腹の間、境界領域に少陽があり三焦がある。という構造であります。また、背中の腎部の命門を臟とし、腹部の臍下丹田の三焦を腑とし、両者を表裏の関係でとらえる見方が存在していたことが知られます。

以上の三焦と命門の議論を六六難と比較するとおもしろい結果が得られます。(4)の六六難をもう一回みてもらいますと、原気の部位を「臍下腎間の動気」としてますね。明らかに臍下は三焦に、腎間は命門に当たるわけですね。この両方の源泉部位を原としているわけです。以上の理由から六府のひとつとしての三焦は、『難経』六六難の三焦論の中に含まれるという結論に達するわけです。

次に三焦が膀胱とつなげて論じられる理由について(10)の『靈枢』の本蔵篇の例から考えてみたいと思います。「腎は三焦膀胱に合する、三焦膀胱は腠理豪毛その応なり」とあります。腠理毫毛の関係と三焦との関係については既に述べました。文章全体の構成は五蔵に六府を配当させています。ただし、五蔵六府の説ですので府がひとつあまるのです。そこで、腎には三焦と膀胱のふたつが配当される結果になっています。

三焦が腎に配当された理由は先に述べた腎間の命門と三焦との関係からであります。ただし、腎と膀胱の関係を考え合わせるならば、ここでの三焦は腎から膀胱に至る通路を意味していたと思うのであります。「内景図」を見ますと、腎と膀胱とは輸尿管でつながっているのかとおもうと、実際にはそうは書いてないですね。腎は生殖器とつながっている。そのかわりに今の輸尿管に相当するものが、腎臓からではなくて闌門から書いてある。二つのすじに注目するならば、こっち側が精の通路で、こっちが水の通路という事になるわけです

(10) 「靈枢」 「本蔵」

肺合大腸大腸者皮其應也心合小腸小腸者脈其應也肝合膽膽者筋其應也脾合胃胃者肉其應也腎合三焦膀胱三焦膀胱者腠理豪毛其應也

骨密理厚皮者三焦膀胱厚粗理薄皮者三焦膀胱薄腠理疏者三焦膀胱緩皮而無豪毛者三焦膀胱急豪毛美而粗者三焦膀胱直希豪毛者三焦膀胱結

腎應

(「太素」6 「蔵府応候」により補正)

ね。

ここで精と水との関係をはっきりさせなければならぬと思います。『靈枢』の五癯津液別篇に「五穀の津液が和合して膏になってそれが内滲して骨空にはいつて精髓や骨髓液ができ、脳に入ったり、生殖器に入ったりする」とあります。津液がよりコンデンスされてピュアになったものが精であり、丹田や骨髓等に貯蔵されている。精髓はこのようにして作られるわけですがけれども、これを逆手にとりますと、精を生成し損なった津液、あるいは形成過程で代謝・排泄された津液が尿となって膀胱にたまるということになります。すなわち精気と水とは表裏の関係になっていると理解できます。精気の通路という

立場以外に水の通路という立場で三焦が論じられることも古典の中にたくさんでてきます。たとえば(11)(12)に示す例であります。ここでは上焦における皮膚の蒸散作用と、それが止まってしまって膀胱にいたる下焦の水分代謝作用が関係づけて論じられています。

以上のことから「膀胱三焦」と論じられている三焦と原気の別使の三焦と起源は同じだということがわかるとおもいます。ここで先ほど保留しました(5)の營衛生会篇の下焦についてもう一度

見てみたいと思います。ここでは下焦は廻腸から分かれる。この場合の廻腸は少腹の腸であります。廻腸の一定の箇所から膀胱に至る水の通路を下焦と規定しています。一般的に廻腸の分かれる箇所というのは闌門すなわち空腸と廻腸の連結部位であると解釈されています。したがって胃腸の消化を主題にした營衛生会篇の下焦論も「原気の別使」の三焦論に由来するものであることがこれでわかるとおもいます。

(つづく)

(12)

「靈枢」 「五癯津液別」

上焦出氣以溫肌肉充皮膚為津其留而不利者為癯暑衣厚則腠理開故汗出寒留於分肉之間津聚則為痛天寒則腠理閉氣滯不行水下留於膀胱則為溺與氣

(「太素」 29 「津液」 により補正)

(11)

「素問」 「举痛論」

悲則心氣急肺布葉舉兩焦不通營衛不散熱氣在中故氣消恐則精卻卻則上焦閉閉則氣還還則下焦脹故氣不行

(「太素」 2 「九氣」 により補正)

# 三焦の再検討とインド・ギリシャ医学に みられる類似の生理観について（下）

東京理科大学薬学部

遠藤次郎

## 7、三部と三焦

ここでもうひとつ視点をかえます。というのは今日もっとも一般的に使われている三焦について検討する必要があります。この見方はひどく飛び離れているようにみえます。したがってこれまでの三焦の研究者たちはこれは全然別というかたちで捉えるむきが多いようですね。体幹部を胸部・上腹部・下腹部の三部に分けておのおの上焦・中焦・下焦とする 今日行われている三焦の見方は『素問』『靈樞』『難経』の中にはなくて、王叔和の『脉経』に始まるといわれています。ただこれもはっきりしないようでありまして、王叔和の『脉経』をみてもほんとうに体幹を三つに分けた三焦なのかというと別な解釈が成り立つようでははっきりわかりません。『難経』一八難等では、この3つの区分を「三部」と表現しています。三部が時代が下るにつれて、三焦といわれるようになったようですね。一応ここでは三部を意味する三焦といわせてもらいます。三部を意味する三焦を考察するに先がけて、いくつかのことを検討しておかなければなりません。その一つは(13)に挙げました三焦と心包の関係であります。三焦と命門が表裏の関係にあることは既に明らかにしましたが、ここにあげた二五難の例や今日の経絡説では三焦と心包を表裏の関係で捉えるのが一般的であります。太陰肺経・厥陰心包経・少陰心経ですね。これに対して陽明大腸経・少陽三焦経・太陽小腸経。3つの陰経と

(13)

「難経」二十五難

二十五難曰有十二經五藏六府十一耳其一經者何等經也然一經者手少陰與心主別脈也心主與三焦爲表裏俱有名而無形故言經有十二也

3つの陽経が横隔膜を境としまして表裏の関係になっています。深いところで心、浅いところで肺、その中間は心包、上に大腸、下に小腸、その境に三焦ということですね。結局境界同志の蔵府、心包と三焦が表裏関係にあるという構造であります。

## 8、膏肓と三焦

『難経』三一難(6)では心包と三焦の関係をやや違った視点で把握しています。ここでは上中下のおおのの治療点を、上焦は膻中、中焦は臍傍、下焦が臍下一寸としています。膻中は心包に関連したつぼと考えてよく、結局ここでの三焦は広義の心包を含めたものであることがわかります。三一難の内容をさらに追求しますと心包と胃をつなげています。すなわち心下から胃の上口に至るとなっていますね。この胃の上口というのは心下部、九針十二原篇の膏の原の鳩尾に相当し、『靈枢』営衛生会篇では胃の上口は上焦と中焦の出発点であります。したがってここで「膏」がいやがおうでも登場してきます。思い切って九針十二原篇の「膏の原」と「肓の原」という見方を三焦論に導入することにします。そうすると、三一難の三焦は次のように解釈することができます。すなわち、その上焦は上の「膏」の原気の別使であり、中焦と下焦は下の「肓」の原気の別使である。中、下焦は下の肓を中心に組まれた原気の別使としての三焦論。上焦は上の膏を中心とした三焦論ということになります。そしてまた心包と三焦の関係も結局のところ、膏と肓から二次的に導き出された論ということになるわけです。膏の原と肓の原という見方に立って(5)の営衛生会篇を見直してみたいと思います。

この篇では上焦と中焦の起点を胃の上口としていっています。「上焦は胃の上口より出ず」とあり「中焦はまた胃口に並んで」と書いてあります。文章の内容からするとやはり胃の上口であります。普通考えれば上焦・中焦・下焦とあるんだったら、中焦はもう少し下から出発してもいいんじゃないかと思うんですけども、何故か上焦も中焦もやはり胃の上口から出ているということですね。すなわち、これが「膏の原」に由来することを暗示しているわけであります。それでもうひとつ下焦はさっき言ったように闕門あたりから出ているということになる。結局『靈枢』営衛生会篇の胃腸の消化で論じられた三焦論もつまるところ上の膏の原と下の肓の原の二つの極から見た三焦論であるというべきであります。

ここでちょっとおもしろい例を示しますが、(14)『素問』痺論の例であります。

(14)

「素問」「痺論」

上(一)

營者水穀之精氣也。和調於五藏。灑陳於六府。  
 乃能入於脈。故循脈之下。貫五藏。絡六府。  
 衛氣者。水穀之悍氣也。其氣慄疾滑利。  
 其不能入於脈。故循皮膚之內。分肉之間。熏於胃。蒸於胸腹。

胃原(一)

(「太素」28「痺論」により補正)

營気は脉の中を流れ五藏六府をめぐり、衛気は脉の外の分肉の間を流れるといった今まで述べてきた内容であります。ここで注意したいのは最後のところに「胃募を熏じ脇腹に散ずる」とあります。募は募穴の募であります。これは膜だと多紀元簡は書いてます。だから胃の膜、すなわち膏の原の膜と理解して良いだろうと思います。この文章は『太素』で補正した文章であります。『素問』ではこの箇所が「膏膜」になっています。すなわち『太素』では上部の膏の原をとっているのに対し、『素問』では下部の膏の原を採用していることとなります。文章の内容からすると、胸腹に散ずるとありますので、横隔膜に近い膏の膜を採ると話が理解しやすい。いずれにしても三焦論に膏の原と膏の原という見方がこの当時から存在していたことを示す良い例ではないかと思えます。ここで予備的な段階をおえまして、三部を意味する三焦について考察してみたいと思います。

### 9、内関と三焦

『外台秘要方』に「夫れ三焦は一名三関なり」と述べています。これは内関の意味であります。内関の病は倉公伝の中によく出てきますね。関はこの場合、体幹部を区切る関節の意味であります。膏と膏は精気の貯っている源泉部位でありますけれども、関節とみる見方も古い時代からあります。関節というのは骨髓液が、貯蓄される場所でもあるわけですね。関節は区切るという面と精気がたまるという両面があります。(32)をみてください。「膏膏の病の再検討」として日本医史学会で発表した資料の一部です。ざっと見てみたいと思います。①九針十二原篇の膏の原と膏の原、鳩尾と腠腧。『太素』ではこれを膏の原・膏の原としています。膏を横隔膜の隔としてとらえています。③の腹中論・奇病論では膏の原で水との関係をのべています。⑥の刺禁論では「膏膏の上、中に父母あり」とあります。これにいろんな解釈がありますがけれども、父母を先天の気の代表とすれば、膏膏という関節のところに陰と陽の精気があるんだと述べているわけですね。⑦の『韓氏外伝』は紀元前2世紀頃ですが、膈・膏の文章がでてきます。⑧の『靈枢』四時気篇では「膏の原」

(32) 「膏肓の病の再検討」 遠藤次郎、中村輝子、日本医史学会例会発表資料 (1991年11月16日)

- ① 『靈樞』九針十二原  
膏之原出鳩尾，肓之原出於膻腧
- ② 『太素』諸原所生  
膏之原出鳩尾，肓之原出於膻腧
- ③ 『素問』腹中論，奇病論  
肓之源在臍下-----不可動，動之為水
- ④ 『甲乙經』卷三，第十九  
氣海，一名膻腧，一名下肓，在臍下一寸五分
- ⑤ 馬王堆出土『十問』  
血氣宜行而不行，此謂款夫，六極之宗也，此氣血之統也，筋脈之族也，不可廢忘也
- ⑥ 『素問』刺禁論（『太素』による）  
膻腧之上，中有父母，七節之傍，中有志心
- ⑦ 『韓氏外傳』（紀元前2世紀中頃）  
無使下情不上通則膈不作  
上砭恤下則肓不作
- ⑧ 『靈樞』四時氣（『太素』による）  
邪在大腸，刺黃之原。  
邪在小腸-----散於肓，結於膻，取肓原
- ⑨ 『申鑿』俗療第三  
膻腧二寸謂之關，關者所以關歲呼吸之氣，以稟授四氣也，故長氣者以關息
- ⑩ 『傷寒論』平脈法  
在尺為關，在寸為格，關則不得小便，格則吐逆
- ⑪ 『素問』六節藏象論  
人迎與寸口俱盛四倍以上，為關格，關格之脈瀕，不能極天地之精氣，則死

「膏の原」とあります。この膏というのは横隔膜ですね。⑧の後漢の『申鑿』という本では臍の部位の「関」で外界の四気をうけて腹式呼吸をするとあります。その呼吸を「関息」というんだと書いてあります。⑩の『傷寒論』の平脉法では尺寸診で関と格について書いてあります。この関格というのは、ご存知のように人迎脈口診のところで最悪の病気の出てきますけれども、もともとこれは内関を中心とした見方であります（関は膏の内関、格は隔すなわち膏の内関）。⑪『素問』六節蔵象論篇の一番最後に「関格の脈羸瘦すると天地の精気を極するあたわず」。これは天地の精気を無理矢理押し込めて人間ができ上っているんだということですね。その精気を押さえ込む力が無くなったから死ぬんだということですね。(31)の寸関尺診の図を見て下さい。寸は手首から一寸、尺は肘から一尺の意味です。ここにある「関」は本来寸（陽脈）と尺（陰脈）の境界（関所）の意味です。尺寸診、あるいは寸関尺診は体幹部に対応しておりまして、脈診の「関」は体幹部の「内関」に相当するわけです。このように内関の概念は脈診に対しても強く影響していることがわかります。ちなみに、『傷寒論』で一番悪い病気というのは心下部に向けて病気が上から下から集まってきた「結胸」という病気です。大陷胸湯とか十棗湯とかで対応しています。この病気はどうにもならないほど難しい。いわゆる膏肓に入った病です。『傷寒論』は膏の病を意識して作られていることがおわかりいただけることとおもいます。

(6)の『難経』三一難の最後の行「三焦、その府気街にあり」という「気街」は狭義では鼠蹊部を指しますけれども、広い意味では気を交流させる関節部を指しています。こういう例からも三焦が関節を意識していることがわかると思います。ここでもうひとつ「膏肓」で注目したいのは、この「膈」と「関」の関節が呼吸と深く関わり合っている点であります。すなわち、上の膈は横隔膜による胸式呼吸、下の膏は丹田による腹式呼吸であります。胸式呼吸や腹式呼吸によって膏肓の精気を外界の気に合わせて体内に運搬するという見方があったわけであります。横隔膜は実際に存在しますから境ははっきりしているのですが、臍部には境というのはない。ギリシャ（ヒポクラテス全集）とかオランダ医学あたりをみてもないです。臍部の関節がおもしろいことに『ティマイオス』には書いてありますね。インドでもこの境は認められています。いったいどうしてこういう所に横に線が引けるのか。腹膜とかいろんな説がありますけれども、いろいろ検討しているうちにわかったの

は、大腹部と少腹部は明らかに腹圧が違う。外から見てもはっきりした線がでてくる。とくに臍下丹田を中心に腹式呼吸をしますと、下腹圧をコントロールできる。当然横隔膜も圧によって上下するわけですが、そんなところから体幹に2つの関節ができたのだらうと思います。特に医学方面では「髑」の関節に注目します。道家の関係では「関」の関節に注目しています。

以上の点を考え合わせますと、三部を意味する三焦は、本来3つに区切った体幹部の関節に注目して名づけられたものであったはずですが、あとになって区切られた体腔部を意味するようになったと推測されるわけです。関節部に蓄えられている精気は体腔部をコントロールするわけで、したがって、関節で区切られた三つの体腔部を三焦とってそんなに大きな間違いはないわけです。ただし関節の機能を意識しない単なる区切られた部分を三焦とする今日の使い方は正しくないと思います。区切られた空間は「三部」というのが正しい使い方だと私は思います。

## 10、焦の字義

以上、主な三焦の見方を検討しました。これらが結局は九針十二原篇等にみられる「膏の原」と「肓の原」の見方から派生したものであろうということ明らかにしました。三焦についてもう一つ重要な点が残されているのです。それは三焦の「焦」という字がどういう意味なのか、三焦の三は天地人の三才を意味することは既に述べました。通路としての三焦は「焦理」または「三焦理」の省略形であることも容易に理解されます。では三焦の「焦」自身の意味が何かという事になります。焦の古典に使われている例をみてみますと、「皮肉焦、皮革焦、毛髮焦、毛腠天焦、皮肉宛焦」のような例があります。これらの例はいわゆる憔悴の焦の使われ方です。憔悴というのは精気が枯渇したときに起こりますので、焦と精が深く関わり合っていることは間違いありません。そんなことと、今までの結果をつなぎ合わせて、焦の意味を考えると次のようになります。本来の、骨髓の中の精とか、関節の中の精気とか、脳や生殖器中の精というのは最も陰性が強いわけですね。精は陰性が強くて、なおかつ「静」であります。動かない。精に気が加わって活動する状態になったもの、それを「精気」という。精自信は動かないものですが、これに気が加わって活動したものが「精気」であります。この論法でいきますと、陰の精に火が加わって活動する状態になったものが「焦」ということになります。ただし、精

に入り込む火がややもすると強くなり、いわゆる「憔悴」するわけであります。焦の原義は小鳥を火で炙る意味でありまして、何かしら火と関連した内容を持っていないと困るわけです。ところが古典の中には直接火と関連させた三焦の議論はみられません。わずかに見られるものとして「皮膚を熏じた」「熏膚熏肉」というような記述がわずかに見られる程度ですね。これを三焦全体の熱の例とは採りにくい訳です。そこで三焦の焦に対していろいろな見解がだされるわけです。いろんな人がめっちゃめっちゃに知っているわけですが、私流に解釈させてもらうならば古典の中に火についての直接の記述が見られないのはおそらく次の理由によるものだろうと思います。それは精を燃やす火は極めて少なくなければならない。ちょっとでも多くなると憔悴の様相を呈するわけです。したがって精を燃やす火は自覚しにくい訳ですね。古典に記載がないのはそういうことだろうと思います。本草によく出てくる「五労六極七傷」の労あるいは「虚劳」の労という病は憔悴し、精気が消耗しておこる病一般でありまして、精確には五蔵の精気の虚損の病です。「七傷」は中極や臍下丹田や生殖器の精気の虚損の病ですね。このように神仙流や道家の影響を受けた書物には近似した概念がよく見られます。精気と火とを論じたものとして命門の火、君火と相火という見方があります。これなどが焦の字義にもっとも近い位置につけているようですが、この概念は中国ではずっと後世になって出てくる概念ですからこの史的展開については省略します。古くは焦は憔悴といったような否定的な使われ方しか見られないわけですね。否定的な使い方では積極的な三焦論は生まれ得ないわけですね。

## 11、「内在する熱」「靈魂」

外界の規則性を導入するための通路としての三焦が「原気の別使」や食物の消化と深くかかわっていることはすでに述べました。ただ、中国伝統医学の中ではこれらの相互の関係は非常に不明瞭です。これに対し、ギリシャの医学や哲学の中では相互の関連性は明瞭です。その一例がすでに引用しましたプラトンの『ティマイオス』です。「生きもの自身のうちに内在している火」が「網目細工」の通路を通りながら外界の空気と交流し火の自立性を保っている。その火と空気による運動の過程で消化運動がおこなわれる——というものでした。

プラトンの弟子アリストテレスは「生きものに内在する本性的な火」を靈魂のは

たらきとしてとらえ次のようにのべています。

「すでに生と靈魂の状態とは、一種の熱を伴うものと述べた。栄養が生じる消化もまた、靈魂と熱とが必要である。それはすべて火によって行われるからである。したがって、身体の熱のある第一の場所に、栄養を司る第一の靈魂も必然的に存在する。これは食物を受ける所と、その剰余物が出て行く所との中間にある。有血動物ではこの部分は心臓と呼ばれる」

「さて靈魂の他の能力は栄養の力なしにはありえない。そしてこの栄養の力は本性的な火なしにはありえない。というのは自然はそれをこの火によって熱くしたからである。ところで火の消滅には、消火と焼尽とがある。……したがって必然にもしそれが保存されようとする場合には、冷却されねばならぬ。というのはこれ（呼吸）がこのような破壊に対する保護だからである」。

（呼吸について 第8章）

ここでも「内在する熱」（靈魂）は呼吸や消化と関連づけられています。「食物をうけとる所と、その残りの出ていく所の間」にあり、呼吸の中心に位置し、体で最も熱があり、靈魂のやどる心臓が「内在する火」の源泉部位としています。ギリシャでは三焦の火は靈魂に代表される生命の本性的な熱とみなされていたわけです。

アリストテレスはさらに精液の中にも体内の本性的な熱が存在することをいっています。この見方は命門の火に極めて近いものです。君火（心火）と相火（命門の火）の考え方はギリシャではかなり古くから主要なテーマとして存在していたとみるべきでしょう。

インドの伝統医学においても体内に内在する熱はギリシャ医学と同じく心臓や臍下の丹田に置いています。このほか、仏典やヨーガなどではこの体内に内在する火を積極的に駆使している例がみられます。それは「苦行」という概念であります。苦行という梵語はタパス(tapas)といいいますが、タパスは語源的には熱を意味します。断食その他の肉体行の苦行によって火を作る。その火によって煩惱を燃やし尽くしてニルバーナの境地に至るというものであります。(26)の例、原始仏典の中でも一番古い聖典でありますけど、この中にも見いだすことができます。(27)の例では火と風の関係で火を燃やすのに風が必要であります。呼吸法で風量を調節して火力をコントロールするわけです。したがって呼吸法と火がつながるわけです。苦

行というものは身体にとっては否定的な材料であります、**「行」**という点では積極的な意味を持っています。(28)では上中下焦を思わせる三段階の飲食物の消化の例です。(29)では火の中心を心臓にしています。そこから支脈がたくさん出ているということが論じられています。

(26) 『スッタニパータ』

四三 (はげみから起る)この風は、河水の流れをも潤らすであらう。ひたすら専心しているわが身の血がどうして涸渴こかつしないであらうか。  
四四 (身体たんじゆうの)血が潤れたならば、胆汁たんじゆうも痰たんも潤れるであらう。肉がなくなると、心はますます澄すんで来る。わが念まごいと智慧と統一した心とはますます安立するに至る。

(中村元訳『ブツダの言葉』七五頁、岩波文庫、一九五八)

(27) 『ハタ・ヨーガ・プラデーピーカー』

二・五一 (ウジャーイー) 口を閉じ、両方の鼻孔から気をゆっくりと飲みこみ、ノドから心臓に至るまでの氣道にふれて音を立てるようにする。それからクンバカ(保息)した後、イダー氣道(左の鼻孔)からイキを吐く。  
二・五二 この調氣法は、ノドのセキを去り、体内の火(消化力)を増強し、  
二・五三 氣道、体液、腹部、すべての體質等に存在する疾患を消し去る。

(佐保田鶴治『ヨーガ根本経典』二二二頁、平河出版社、一九九三)

(28)

『チャーンドーギア・ウパニシャッド』

ところで、上記の三神が人間のなかに入った時にはいかようにして各自が三重になったか？ これについて私の説く処を聴いて明察して貰いたい。

六・五・〔一〕 人が食った食物は三段に分かたれる。最も粗い成分は糞になり、中位の成分は肉になり、最も微かい成分は意になる。

〔二〕 人が飲んだ水は三段に分かたれる。最も粗い成分は尿になり、中位の成分は血になり、最も微かい成分は息になる。

〔三〕 人が食った熱は三段に分かたれる。最も粗い成分は骨になり、中位の成分は髄になり、最も微かい成分は語になる。

〔四〕 こんな理で、意は食物から成り、息は水から成り、語は熱から成っているのだよ、おまえ

(佐保田鶴治『ウパニシャッド』四七頁、平河出版社、一九七九)

(29)

『プラシナウパニシャッド』

〔四〕 喩えば、王がその臣下に向かって『汝は某村落を差配せよ』『汝は某村落を差配せよ』と任命するように、生氣も他の諸氣をそれぞれ配置するのである。〔五〕 排泄と生殖の両器官の上には、呼吸を配置し、眼と耳及び口と鼻の上には生氣(出氣)自らが臨んでいる。身体の中央部には等氣が駐在して、供えられた食物を平等にし(消化し)、その(食物)中からこれら七つの光(166)が生ずるのである。〔六〕 自我は心臓の中に駐まっている。そこ(心臓)に百一本の脈管があり、それらの脈管の一

一に百本ずつの血管があり、その一本ごとに七万二千本の支脈がある。これらの脈管の中で活躍しているものは介氣である。〔七〕 次に、上氣は一本の血管によって上り、善行によっては善福の世界へ導き、悪行によっては禍患の世界へ導き、善惡帯同の行為によっては人間界へ導くものである。

(佐保田鶴治『ウパニシャッド』二六五頁、平河出版社、一九七九)

12、中国伝統医学における三焦の問題点

以上で三焦の検討を一応終えますけど、最後に漢方の古典の中で三焦論がかなり異質であることを指摘しておきたいと思います。そして、三焦が中国独自のものではなく、西域から導入された概念ではないかということをも指摘して終わりにしたいと思います。

まず一番目にあげられるのは、今述べたとおり、焦の熱としての意味が古典の中

で明示されていない、消極的な、病的なところでは書いてあるけれども、前向きな面がない。三焦の概念を生み出すエネルギーが感じられない。苦行というのは、インドのおはこでありまして、中国の道家をみても積極的に苦行を採用していないようです。そのへんからしても自国から生み出すパワーが感じられない。

二番目としてこれが体液論だという点であります。津液と血液を中心とした営衛の体液論でありますけど、三焦の概念を抜かして古典をみると『内経』医学というものは蔵府・経絡でまとめられており、体液論というのはあまり発達していない。一方、一般にいわれているように、ギリシャ・インド医学というものは体液病理であります。4体液とかトリドーシャとかが主流であります。三焦論では経脈を流れているのは血液です。隧道を流れる血液であります。これをたてにとると「経脈」はいままでいう血管だということになるわけです。ところが一方で経絡は井穴から出てこれを針のひびきとして感じる。この経絡に血液が流れているということになってしまう。経絡は本来精気が流れるものであって血液ではない。経絡論に体液論がのっかってしまったために、こういうことになったのではないかと私は思う。

三番目として『ティマイオス』の網目の説やインドの苦行論説というのは「地水火風」の四大説から生み出されたものです。「地」が個体で、「水」が液体で、「風」が気体、「火」が「水」と「風」の中間です。地水火風に行くに従って粗なものから微細なものへ上昇します。ギリシャでは「地水火風」で火が一番上、一番微細で細かいところまで侵入する元素だとしています。さっきいった苦行などの理論も「火」の打ち壊す力によって煩惱まで打ち壊してニルバーナを得るというものです。このような火の属性は中国の陰陽五行の木火土金水の火からは導き出すことはできません。粗大から微細という概念は五行説にはありません。すなわち、焦の概念は五行説から生み出すことができない。これが三番目の疑問点であります。

四番目に『ティマイオス』の中にも見られますが、殊にインドの伝統医学では胃腸の消化があらゆる生理・病理の基本になっています。その消化によってドリドーシャ（バータ、ピッタ、カッパ）が生じて多くの病気の原因になるとしています。ところが漢方医学をみてみますと五臓を中心に考えていまして、六腑は五臓のウラの存在でしかない。これは非常に都合が悪いというか、あまり自然でないですね。たとえば『傷寒論』から安中散や平胃散のようないわゆる健胃薬を捜せといわれるとちょっと困る。胃腸が無視されている。これは五蔵論を中心にしているからであ

ります。ところが古典を見ると三焦論のところだけが突然胃腸の消化について詳しく述べられています。

以上のような理由から漢方医学の三焦論は、インドやギリシャ医学の影響があるのではないかと考えています。話しはずれませんが、「痰」という概念はあたかも中国古くからあるような気になってはいますが、痰という字は『素問』『靈樞』などの古典にはでてこないです。これは仏教医学をうまくとりこんだ概念です。「痰」というのはトリドーシャの一つであります。汗吐下という治療法がありますが、『傷寒論』には汗と下というのがありますけど、吐という治療がほとんどない。吐という字は『素問』『靈樞』の中にはないようですね。嘔という字を使っていたようで。吐法もどうも西域からかなという感じです。華佗が西域の人であることは有名です。ずーっとさかのぼっていくと今回のテーマであります「病が膏肓に入る」という話しぶち当たります。この話しは春秋の時代のものです。秦は当時は一番西に位置していました。当時の秦の国には名医が多いという事で何回も医者をよくでいます。ということをお考えすると、春秋戦国あたりにすでにも何かの形で西域の影響を受けているのではないかと考えられます。となると漢方の独自のものは何かと逆に疑問視したくなるのですけれども、私は経絡の発見というのは中国のオリジナルだと確信しています。確かに似たような話しはインドにもありまして、経絡の源泉はインドだというアーユル・ベータ研究の連中はいいですけど、わたしは違うと思う。経絡の発見こそ中国伝統医学の誇るべき点だろうと思います。

中国人というのはいろんなものを入れながらいつの間にか自分流にすり替えます。中国人は外来のものであることをいわない。だから我々がやるしかない。そんなところも含めまして、漢方医学の入り交じっているところをもう少しクールなかたちで見直して整理し、作りなおしてみたいというのが今の私の研究目標あります。以上おわります。 (おわり)